

審査委員会委員長賞 たった一言が言えなくて



愛知県 蒲安市立蒲郡中学校 3年 荒島 彩乃

「うちの親、まじでうざい。」

友だちと話していると、よく聞く言葉。私は笑顔で「そうなんだ」と返します。でも、心の中では「なんでそんなことを言うの。それはあなたのことを思って言ったことなのに。お母さんがいなくなった生活を考えたことがあるのかな」と、ぎゅっと締めつけられたような気持ちになります。

2013年。私は母を亡くしました。暑い夏の日「今日は調子がいいから」と言って母は洗濯物を干していました。増えていく「疲れた」の言葉、辛そうな表情。母が体調を悪くしていったのはその時からでした。

あの時、「私も手伝うよ」と言えていたら。その時だけではありません。ご飯を作っている時、掃除をしている時、お皿を洗っている時、私は「手伝うよ」の一言がどうにも照れくさくって言えませんでした。

「あれがほしい。これ買って」私はわがままでした。たくさんのわがままで、母を困らせてしまっていました。そんなこと、我慢していれば母はもっと元気でいられたかもしれません。

「部屋を片付けなさい。」「こんなことしたら駄目でしょ。」母に叱られ拗ねる私。母からの言葉に対して適当な言葉を返す私。酷いときには母を無視した私。素直になっていけば。もっとたくさん話していれば。今、数え切れないほどの後悔があります。

そんなたくさんの後悔の中でも、いちばん後悔していることがあります。それは「ありがとう」が言えなかったことです。

母との大切な思い出。母が亡くなる前に、私と母はディズニーランドへ二人で旅行に行きました。「あーちゃん、どこへ行きたい」と訊いてきた母に、私は「旅行に行けるんだ」「いつもは家族揃ってだけど、お母さんと2人で旅行なんて珍しいな」なんて考えていました。いつもは姉兄妹3人で母を取り合う私たち。母と2人きりで行ける、しかも泊まりで行くディズニー旅行に私は胸を弾ませていました。

いつもは母がカメラマンで撮っていた私たち家族の写真。でもこの旅行では、キャストさんや周りのお客さんに頼んで母と2人の写真をたくさん撮りました。私が大好きな乗り物にも繰り返しいっしょに乗って。私にとって夢のような2日間でした。

今思うと、自分が生きられるのはもう長くないと覚悟した母が、私たち姉兄妹1人1人との時間を作って、思い出を残してくれたのだと思います。でもあの時、私はただ楽しんでばかりで、心からの「ありがとう」が言えませんでした。母を亡くしてから4年が経ち、父の携帯を借りていじっていた私は、ふと気になって、父と母のメールのやりとりを見ました。そこには「同じ病室の人のいびきがうるさくって耳栓が欲しいよ」とか「ご飯がうなぎだった。珍しい。」など写真付の病院生活の様子から、「検査の結果が良かったから早く退院できそう」「今日は体調が悪い」といった病氣と闘っている母の姿がありました。

しかし、そんな母の闘病の様子以上に「あーちゃんは元気にやってる」「あーちゃんの夏休みの宿題は大丈夫そう」など、会話のほとんどが私や兄、姉についての話題に溢れていました。

母を亡くしてから気づきます。病気で辛いのに、自分より私のことを考え、私のためにたくさんのことをしてくれていたこと。私に深い愛情を注いでくれていたこと。そんなことも分らず「ありがとう」のたった5文字も言えませんでした。

「うちの親、まじでうざい」

私も、家族に対して内心「うるさいな」「放っておいてよ」と思うことがあります。でもそんな時、心のどこかで気持ちにブレーキをかけます。うざいと感じた相手の言葉の裏には、自分に見えていない相手の思いがあるかもしれません。だから私は、そのときの感情だけに流されず、言葉や行動の後ろ側にある思いや考えを感じ取り、受け止められるようにしたいのです。

今ある日常は決して「あたりまえ」ではありません。だんだんと変わり、いつかはきっとなくなっていきます。ありふれた日常の中にある、身近な人の思いに対して丁寧に向き合い、感謝の気持ちを伝えていきたいです。